

天平の風が吹く場所

史跡相模国分寺跡 〈国指定史跡〉

問 教育総務課 ☎(2365)4925

現在、歴史公園として保存整備され、広く親しまれている史跡相模国分寺跡(国分南1・19付近)は、1921(大正10)年3月に史跡として指定されました。今号では、天平の昔から続く相模国分寺の歴史を振り返ってみたいと思います。

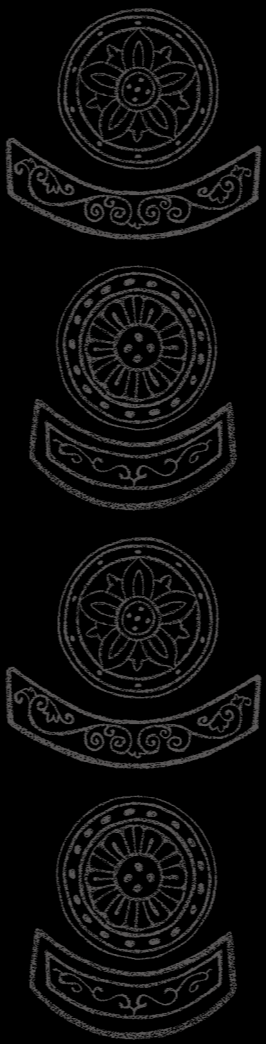
全国の国分寺・国分尼寺は、741(天平13)年、聖武天皇の「国分寺建立詔」を受けて建立されたもので、相模国分寺もこの詔によって、8世紀中頃には創建されていたと考えられています。

全国にある国分寺の多くは国府(※1)のそばに建立されましたが、相模国分寺の創建当時、相模国の国府は現在の平塚市にあつた

と考えられています。なぜ、国府から離れた場所に国分寺が建立されたのか。有力な説として、関東地方の寺院建立に深く関わっていた壬生氏(※2)が高座郡周辺を拠点にしていたため、ということも伝えられています。

9世紀に入り、相模国分寺は激しい火災や地震に見舞われたことが明らかになってきているほか、律令国家の衰えとともに、相模国分寺も徐々に衰退していきました。

その後、復興と再興を繰り返し、相模国分寺は江戸時代に現在の場所に移りました。同寺境内の鐘楼には、鎌倉時代に作られた国の重要指定文化財の梵鐘があります。



1 上空から見た史跡相模国分寺跡の伽藍配置全景(平成22年撮影)。中門跡(①)から向かって左に塔(②)、右に金堂(③)、塔と金堂の背後に講堂(④)を配し、塔と金堂を回廊などで囲む法隆寺式伽藍配置がとられています。

2 相模国分寺の軒丸瓦・軒平瓦の文様は、「創建(Ⅰ期)」と「再建あるいは修理(Ⅱ期)」に使用されたと考えられる2種類があります。写真は創建期の軒丸瓦で、塔の屋根の先端部にあつたものと考えられています。



3 発掘調査中に出土した、塔の先端に取り付けられた相輪の一部である水煙。水煙の模様は、残存部分から幾何学的な模様であったと推定されています。出土した水煙の中には表面の鍍金が残る保存状態の良いものもあり、これらは郷土資料館「温故館」で一般公開されています。



歴史あるまちに暮らす私たちが、今日も、史跡相模国分寺跡では子ども達の笑い声が響いています。歴史遺産を次の世代へ受け継いでいくためには、わがまちの歴史を知り、伝えていくことが必要です。史跡相模国分寺跡に足を運び、いにしえから続く営みに思いを馳せながら、天平の風を感じてみませんか。

※1 国府(こくふ)：奈良〜平安時代の各国における政治的中心都市。政務を行う施設(国庁)が置かれていました。
※2 壬生氏(みぶし)：平安時代に壬生直黒成(みぶのあたにくるなり)という人物が高座郡の役人(郡司)であった記録があります。

※1 国府(こくふ)：奈良〜平安時代の各国における政治的中心都市。政務を行う施設(国庁)が置かれていました。
※2 壬生氏(みぶし)：平安時代に壬生直黒成(みぶのあたにくるなり)という人物が高座郡の役人(郡司)であった記録があります。

【講堂跡】 金堂とほぼ同じ規模で、高さ1mほどの基壇の上に、12個の礎石が現存しています。
【中門・回廊跡】 発掘調査では、中門の基礎として地面を突き固めた跡が見つかりました。
【僧坊跡】 僧が日常生活を送った建物で、東西に長く広がりを持っていました。発掘調査では、8部屋が確認されました。現在は、その位置を平面表示しています。

●解説・相模国分寺跡
【伽藍(建物)配置】 奈良県の法隆寺と同じく、東側に金堂、西側に塔、北側中心に講堂を配し、周囲を中門・回廊で結ぶ「法隆寺式」という配置をとっています。これは全国の国分寺の中でも珍しい配置で、相模国分寺跡のほか、下総国分寺跡(千葉県市川市)でしか確認されていません。
【塔跡】 国分寺のシンボルと言えるもので、高さ1・3mほどの基壇上に建てられていました。塔跡は整備され、現在は基壇の様子が復元されています。また、塔は古代建築学から、復元すると七重で高さが65mあったとされています。海老名中央公園には、七重の塔のミニチュメントが設置されています。
【金堂跡】 仏像を安置した建物の跡で、基壇が残っています。36個あった礎石のうち、基壇上に16個が現存しています。基壇は塔跡とは異なり、周囲に川原石を貼り付けた外装でした。

1月11日(土)9時45分から、史跡相模国分寺跡で「平成26年武道始め式」を行います。
歴史ある地で、市内6団体の演武者が迫力ある演武を披露します。皆さんぜひご来場ください。

